

メロンの需給動向

調査情報部

主要産地



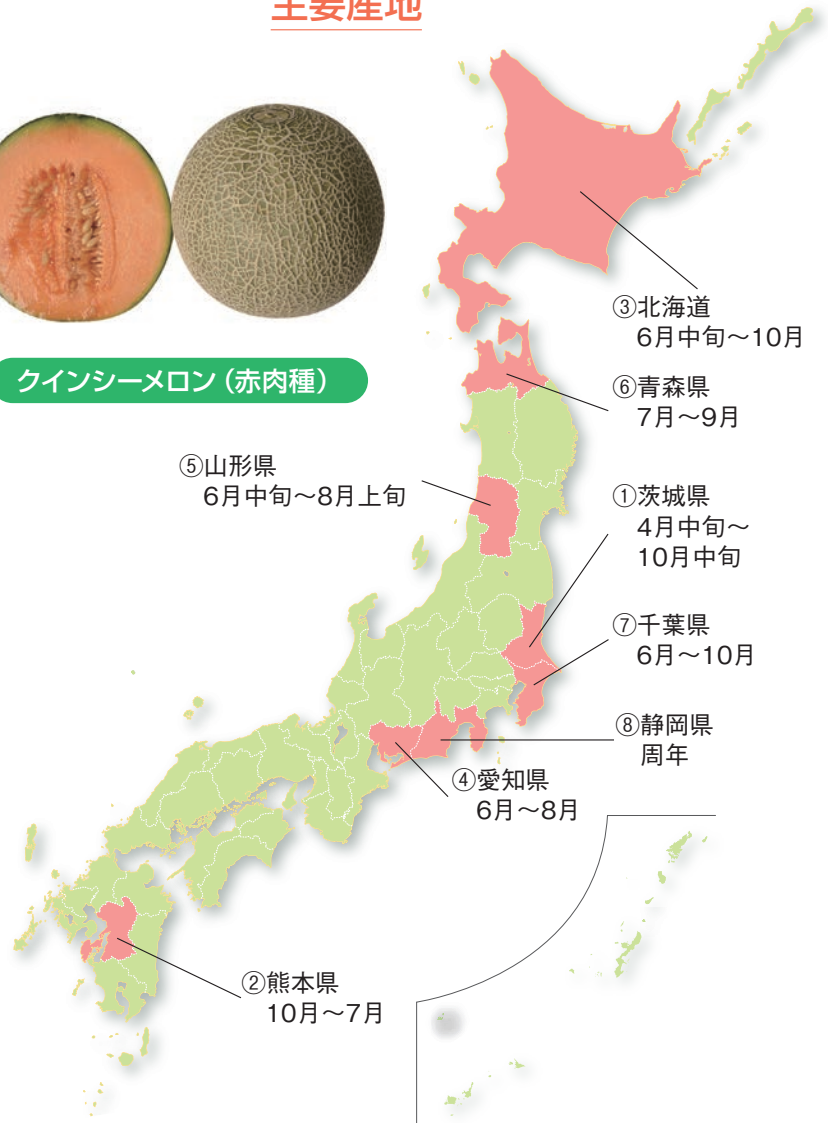
プリンスメロン (青肉種)



クインシーメロン (赤肉種)



ホームランメロン (白肉種)



資料：農林水産省「令和4年産野菜生産出荷統計」

注：図中の番号は収穫量の多い順番、期間は主な出荷期間を表している。

メロンはウリ科のつる性一年草で、ドイツのミュンヘン大学の研究者らによって原産地はインドであることが2010年に証明された。インドからイランへ伝播し、紀元前3000年頃のイラン南東部の古代遺跡から種が発見されている。栽培の歴史は古く、紀元前の資料にも記録が残っているが、古代のメロンは現代のような甘いメロンではなかったと考えられている。

日本には中国から伝わった東洋系品種であるマクワウリが弥生時代からあったが、西洋

系品種のメロンは明治時代に欧米から伝来し、大正時代に英国から温室メロンの技術が導入され品種改良が始まった。

昭和30年代後半に人気が出た「プリンスメロン」の登場で、それまで高級であったメロンが一般家庭にも身近なものとなった。また、メロンはその果肉の色から「青肉種」「赤肉種」「白肉種」の3つに分類されるが、平成に入ってから「クインシーメロン」に代表される赤肉メロンブームが始まった。

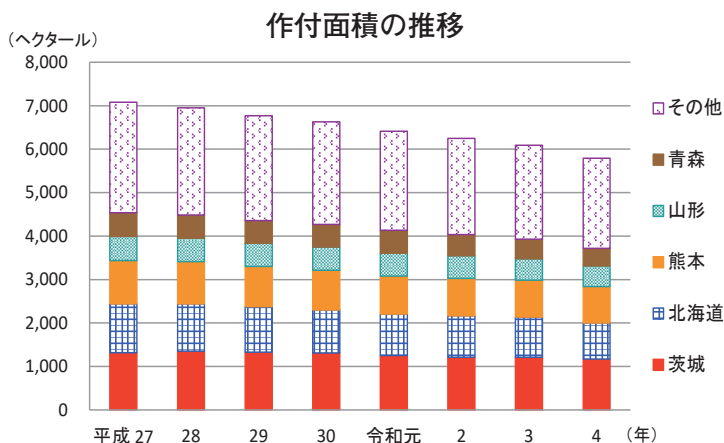
作付面積・出荷量・単収の推移

令和4年の作付面積は、5790ヘクタール（前年比95.1%）と、前年に比べてやや減少した。

上位5道県では

- ・茨城県 1170ヘクタール（同 96.7%）
- ・北海道 835ヘクタール（同 90.3%）
- ・熊本県 832ヘクタール（同 98.0%）
- ・山形県 475ヘクタール（同 96.0%）
- ・青森県 407ヘクタール（同 90.6%）

となっている。



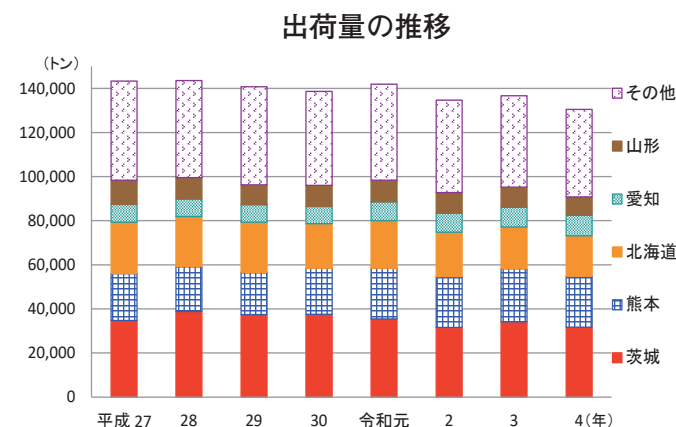
資料：農林水産省「令和4年産野菜生産出荷統計」

令和4年の出荷量は、13万500トン（前年比95.5%）と、前年に比べてやや減少した。

上位5道県では、

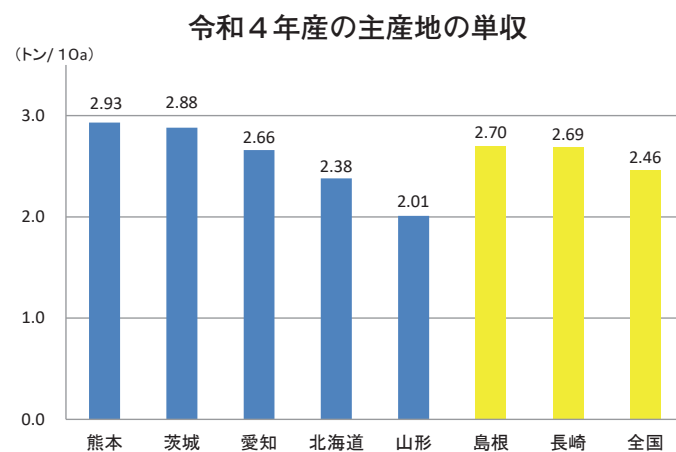
- ・茨城県 3万1700トン（同 92.7%）
- ・熊本県 2万3100トン（同 96.3%）
- ・北海道 1万8400トン（同 97.4%）
- ・愛知県 9280トン（同 102.7%）
- ・山形県 8350トン（同 91.9%）

となっている。



資料：農林水産省「令和4年産野菜生産出荷統計」

出荷量上位5道県について、10アール当たりの収量（単収）を見ると、熊本県の2.93トンが最も多く、次いで茨城県の2.88トン、愛知県の2.66トンと続いている。その他の県で多いのは、島根県の2.70トンであり、全国平均は2.46トンとなっている。



資料：農林水産省「令和4年産野菜生産出荷統計」

作付けされている主な品種等

メロンの分類は、果肉色によって分けられるほか、果実外観（網目）から、アールスメロンやクインシーのようなネット系と、プリンスの

ようなノーネット系に分けられる。またメロンの品種は、県や地域のオリジナル品種も多いのが特徴である。

都道府県名	主な品種
茨城県	アンデス、クインシー、イバラキング、オトメ、レノン、タカミ
北海道	夕張キング、ルピアレッド、レッド113、ティアラ、G-08
熊本県	アールスメロン、アンデス、クインシー、肥後グリーン
山形県	アンデス、クインシー、ルピアレッド
青森県	タカミ、レノン

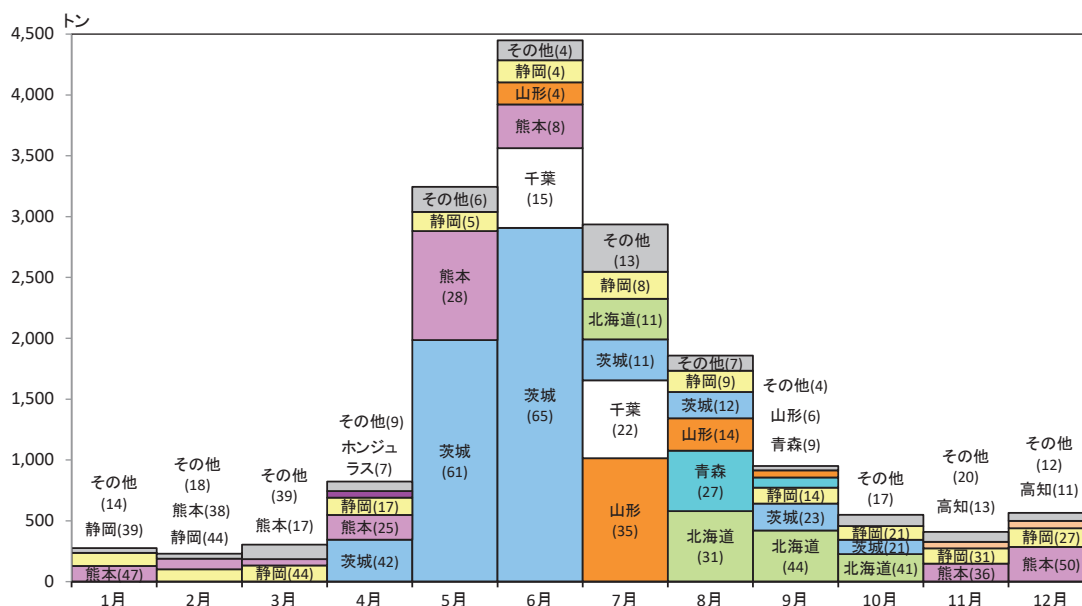
資料：関係者聞き取りにより農畜産業振興機構作成

東京都・大阪中央卸売市場における月別県別入荷実績

東京都中央卸売市場の月別入荷実績（令和5年）を見ると、数量は少ないものの通年で静岡産が入荷する。5月に茨城産と熊本産の入荷量が急増し、ピークとなる6月

には千葉産も加わる。7～10月は減りながら推移するなかで山形産、北海道産、青森産など冷涼地からの入荷が増える。年末年始は再び熊本産が増える。

令和5年 メロンの月別入荷実績
(東京都中央卸売市場計)



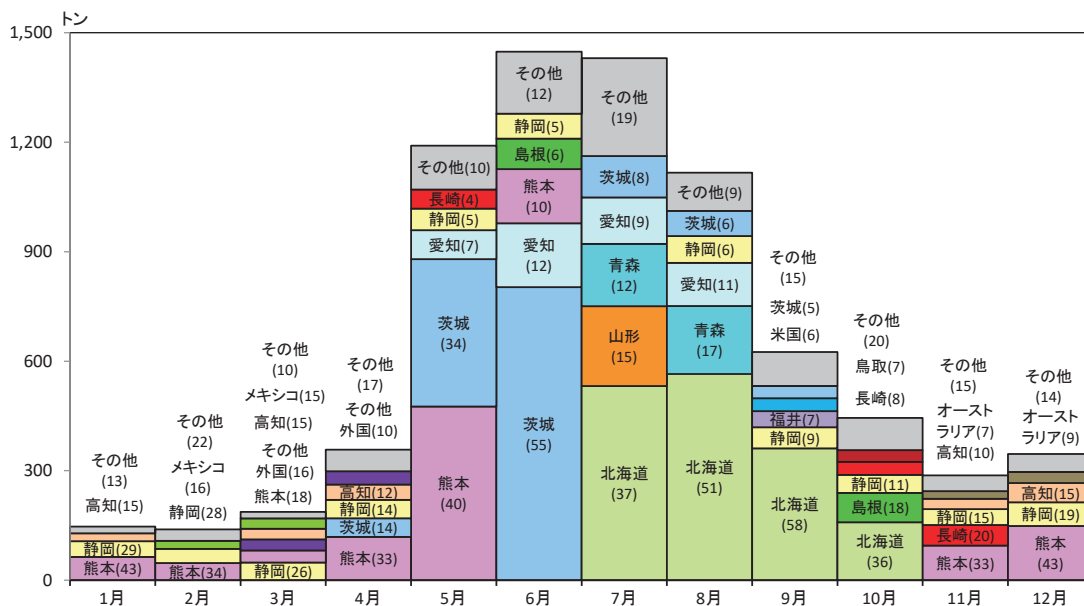
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：令和5年東京都中央卸売市場年報）

注：（ ）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（％）である。

大阪中央卸売市場の月別入荷実績（令和5年）を見ると、数量が増える5月は熊本産と茨城産が大半を占め、ピークとなる6月は茨城産が最も多いが、翌7月から10月は北海道産のウエイトが高くなる。9月以降は一気

に数量が減って、島根産、長崎産、鳥取産、熊本産、高知産といった西南暖地に産地が移行する。11月から翌4月までは、オーストラリア産やメキシコ産などの外国産も見られる。

令和5年 メロンの月別入荷実績
(大阪中央卸売市場計)



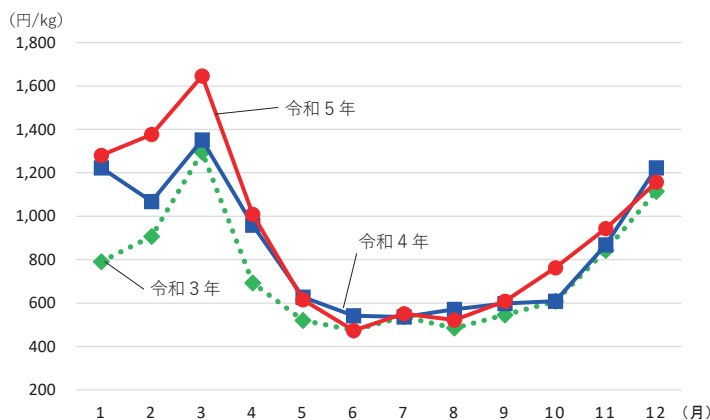
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：令和5年大阪市・大阪府中央卸売市場年報）
注：（）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

東京都中央卸売市場における価格の推移

令和5年の東京都中央卸売市場における卸売価格は、国内産が1キログラム当たり474～1646円（年平均641円）、外国産が同298～520円（年平均376円）の幅で推移している。国内産は、年末から3月にかけて値上がりし、1キログラム当たり単価が

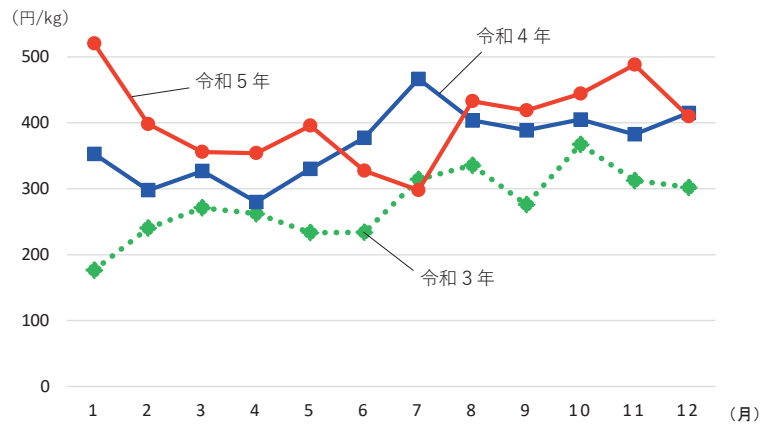
1000円を超え、出荷が増える4月以降10月にかけては1キログラム当たり600円前後で推移する傾向がある。外国産は、国内産ほど価格の変動が大きくなく、令和5年は年間を通じて同400円前後で推移している。

卸売価格の月別推移（メロン・国内産）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：東京都中央卸売市場「市場月報」）
※アールスメロン、ハネデュー、プリンス、アンデス、アムス、ホームラン、クインシー、黄味、その他のメロンの合計（キンショウは無し）。
※ハネデューは令和4年のデータのみ。ホームランは令和3年のデータのみ。

卸売価格の月別推移（メロン・外国産）



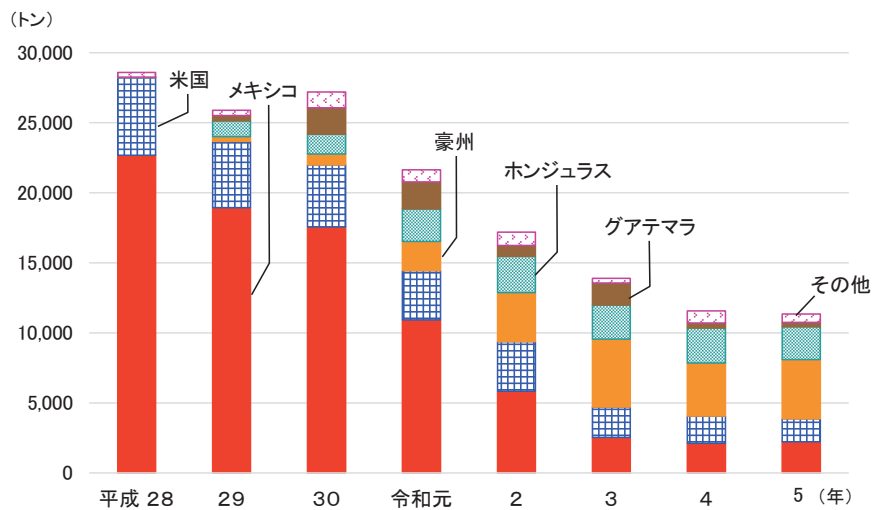
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：東京都中央卸売市場「市場月報」）
 ※ハネデュー、アンデス、その他のメロンの合計（アールスメロン、プリンス、キンショウ、アムス、ホームラン、クインシー、黄味は無し）。
 ※アンデスは令和3年のデータのみ。

輸入量の動向

生鮮メロンの輸入量は年々減少しており、メキシコ産と米国産が減少する一方で、近年は豪州産やホンジュラス産の輸入が増えている。生鮮メロンはカットフルーツやケーキの

材料などとして利用されることが多く、品種はノーネットメロンのハネデュー系がほとんどである。

国・地域別輸入量の推移（生鮮）



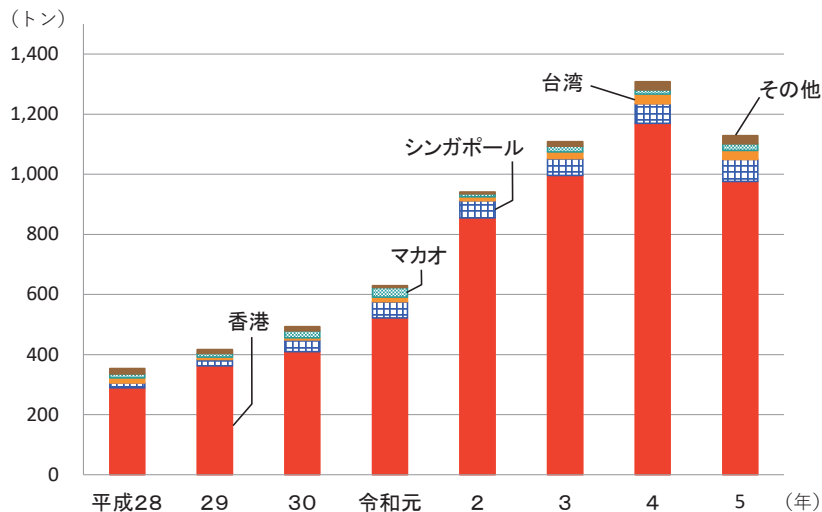
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

輸出量の動向

生鮮メロンは近年、急速に輸出が伸びている。メロンの追熟期間は、収穫後2週間程度であるため長距離輸送には向かず、仕向け先

としては香港が圧倒的に多く、次いでシンガポール、台湾、マカオと近距離のアジア圏が多い。

国・地域別輸出量の推移（生鮮）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

メロンの消費動向

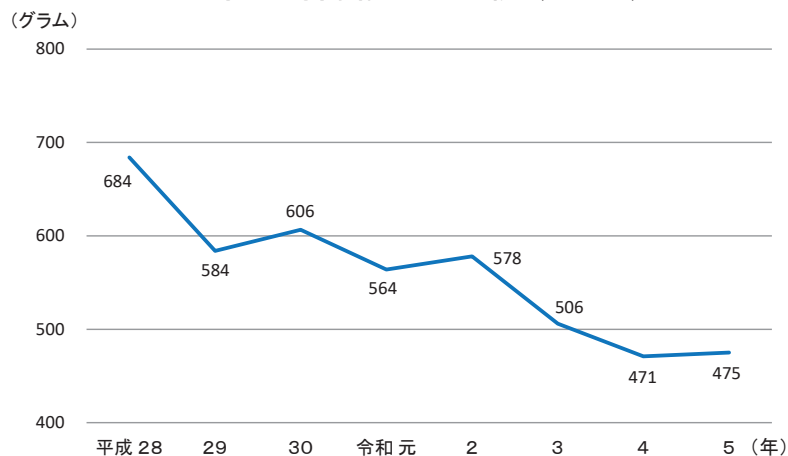
令和5年の1人当たり年間購入量は475グラムで、平成28年に比べて70%程度と大きく減少している。平成18年頃から、1個単位ではなくカットされたものが購入されるようになったことも要因のひとつである。

メロンには、体内のナトリウムを排出する働きのあるカリウムを多く含み、むくみ解消や高血圧予防に効果がある。塩分の多い食事

の最後に、デザートとしてメロンを食べることもおすすめである。赤肉のメロンには皮膚や粘膜を保護するカロテンも多く含まれている。

メロンは追熟することにより香りと甘みが増すため、購入後は常温で保存し、食べる1～2時間前に冷蔵庫に入れると良い。冷やし過ぎは味が落ちる原因になる。

1人当たり年間購入量の推移（メロン）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：総務省「家計調査年報」）